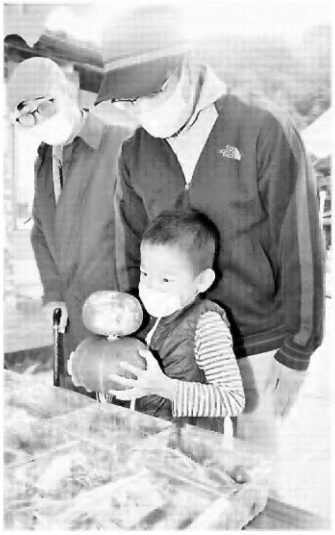

カボチャを手に取る子ども（鳥取市鹿野町河内で）

放棄地再生の苦労 実る

鳥取で催し 収穫野菜を販売

鳥取市鹿野町河内の旧河内生活改善センターで17、18両日、耕作放棄地だった土地を有効活用し、収穫した野菜や果実の販売などをする「はじめての果樹の里山まつり」が開かれた。

農家の高齢化や後継者不足で耕作放棄地が増えたことに危機感を抱いた地元住民らが、2015年に発足させた「鹿野町河内果樹の里山協議会」の主催。収穫したカボチャやサツマイモなどを販売し、多くの来場者が買い求めていた。会場近くの放棄地では、ハナモモの苗木30本を植樹するイベントもあった。

協議会は所有者から無償で借りた耕作放棄地を耕して、農作物を栽培している。現在は地区内の約4㌶でイチジクや柿、栗など12種類の農作物を手がける。協議会と交流のある鳥取大学や大阪国際大学（大阪府守口市）の学生も農作業などを手伝っている。

鳥取大OBで協議会メンバーの長友芳樹さん(23)は「当初は葛の根が張り巡らされた土地を重機で耕すなど苦労した。よくここまできた」と誇らしげに話していた。